

平成27年度第65回卒業式

(県内最高齢の高校生 85歳 吉田郷里さんの答辞)

3月1日、快晴のもと、卒業式を挙行了しました。この日は吉田郷里さん(85歳)が県内最高齢の高校生として卒業式を向かえ、多くの新聞社や放送局が取材に訪れました。以下に答辞全文を載せます。



答辞

春の訪れを感じるこの佳き日に、私たち卒業生は、無事、旅立ちの日を迎えることができました。このような盛大な卒業式を挙げていただき、誠にありがとうございます。

また、校長先生をはじめ、ご来賓の方々、そして在校生の皆様より、心温まるご祝辞や激励の言葉を頂戴し、お礼の申し上げようもございません。

思い起こせば、私は成人特例入学者選抜で入学を認められ、本日を迎えました。

「その年齢でなぜ高校受験をしたのか？」とよく聞かれたものです。私は受験当時、こう考えていました。

人間は何歳になっても迷います。「生き方に迷ったら勉強しよう」と思っていました。若い人たちが学ぶ環境に身を置き、様々な教科を、新鮮な視点で学びたいと思いました。

私は、受験準備を始めました。しかしすぐに困ったことに気づきました。

私は1930年に生まれ、現在85歳です。終戦のときは14歳でした。学歴は国民学校高等科卒業、現在の中学二年生程度で、高校入試資格に達していないのではと思ったのです。

残念。「私は高校で学べないのか」と思うと無念でした。

諦めきれずに、土浦一高の正門前で、校舎を見上げ、悔しさをこらえ、引き返したこともあります。

ある日のこと。「ダメで元々」と私は腹をくくり、土浦一高を訪ね、受験制度について相談しました。

先生たちは「このおじいさんが高校生に？」と驚かれたかもしれません。

でも私は本気でした。

そして結果は……。まさに驚き桃の木山椒の木。「成人特例選抜の受験が可能です」という返事を貰いました。試験科目は面接と作文。朗報に耳を疑いました。面接と作文なら、今までの人生経験を生かせます。そして無事入学できたのです。

定時制高校の修業年限には、3年と4年がありますが、私は四年を選択しました。

その理由は、定時制の諸先輩方が、長い年月を経ているにもかかわらず、同窓生として、旧交を温め合っている姿を見て、自分も同級生と卒業後も親密な交流を保つためには、長く机を並べることが大切だと考えたからです。

4年間のなかで、先生方とは勿論のこと、同級生、後輩の人たちとも、気軽に声を掛け合えるように

なりました。とても嬉しいことでした。

ここで培ったその関係を、今後も続けていくよう心がけていきます。

定時制での高校生活には、楽しい思い出がいくつもあります。

文化祭では、射的コーナーで子どもさんたちに喜んでもらえるよう、工夫を凝らしました。

ディズニーランドへの遠足では、英語の案内板を翻訳しました。

日本科学未来館の見学では、ニュートリノの研究で、ノーベル物理学賞にもつながった「スーパーカミオカンデ」に使われている巨大な真空管を見て、その迫力に圧倒されました。

球技会では、一勝を目指して、卓球の練習に励みましたが、若い人の前では歯が立ちませんでした。どれも素晴らしい体験でした。

さらに私にとって、一番の思い出は、前期後期2回ずつの定期考査です。

考査に備えて私は、教科書とノートを何回も読み返しました。

先哲が残した「読書百編義自見(どくしょひゃっぺん ぎおのずから あらわる)」との言葉が私にも当てはまるか、確かめたかったのです。

結果として、学習を通して、その正しさの一端に触れることができました。

これからの社会生活の礎の一つを、土浦一高定時制での学び中で、無理なく体験させていただけたものと感謝しております。

私が土浦一高定時制で学んだもう一つの大切なことは、校訓にある「自主・協同・責任」です。私はこの言葉を、私たちが社会生活を営むうえでの規範となる教えと受けとめています。

「自主」とは、一人一人が自立し、他者に依存したり責任転嫁したりすることなく、自分自身の考えで行動することです。「自主的」であるためには、一人一人が「責任」を背負い、果たしていかなければなりません。また、私たちがよりよい生活と豊かな人間関係を築くには、多様な他者との「協同」が肝心です。そのためには、自分なりの高い「倫理観」を求め続ける必要があります。

図らずも、今年中には十八歳で選挙権を得られるようになります。私たち卒業生は、平和で民主的な国家の形成者としての必要な資質を、益々求められるでしょう。それを考えるとき、私は改めて土浦一高の校訓である「自主・協同・責任」の教えに思い至ります。

卒業生一同、これから様々な困難に立ち向かうに違いありません。

しかし、「自主・協同・責任」の校訓を胸に、辛くても耐え、これからも精進を続けてまいります。

どんなときも、この学び舎で結ばれた多くの恩師や友が、いつでも心の門を開いてくれていると信じて、生きていきます。

さて、最後になります。

この時期になると、いつも心に浮かぶ、在原業平が詠んだと言われる一首があります。

をしめども 春のかぎりの今日の日の 夕暮れにさへ なりにけるかな

『いくら名残を惜しんでも、春のこの日の、しかも夕暮れ時まで、とうとうなくなってしまった』という意味です。

別れの時が迫りました。私たち卒業生は、旅の衣をしっかりと整え、土浦一高定時制で学んだ者らしく、胸を張り、眉を挙げて、一步一步力強く、学び舎を後にしたいと思います。

長い間のご指導に感謝申し上げますとともに、卒業後も、よろしくご指導ご鞭撻ください。

本日は、本当に有難うございました。皆様方のご活躍をお祈りし、答辞とさせていただきます。

平成28年3月1日

茨城県立土浦第一高等学校定時制普通科

第65回卒業生代表 吉田郷里